

■ ■ ■ プログラム ■ ■ ■

歌	曲 目	詞	作曲
1. 栗原 未和 (ソプラノ)	春の唄 秋の流れ 章魚つき 箏 : 砂崎 知子 尺八 : 川村 泰山	島崎 藤村 吉田絃二郎 玉置 幸三	宮城 道雄 宮城 道雄 宮城 道雄
2. 田嶋 喜子 (ソプラノ)	<small>はなぬすびと</small> 花盗人 箏 : 砂崎 知子 尺八 : 川村 泰山	鶴岡千代子	平井康三郎
3. 中嶋 啓子 (ソプラノ)	萬葉による挽歌 ヴァイオリン : 千葉 純子 箏 : 横山佳世子	柿本 人麿	中嶋 恒雄
4. 福永 圭子 (メゾ・ソプラノ)	源氏物語によるタブロー 「海辺の秋」 箏 : 吉岡 絃子		千秋 次郎
.....休 憩 8 分.....			
5. 田嶋 喜子 (ソプラノ)	古都幻想二題より 「面影」とよばれる女面に 能管・篠笛 : 福原 清彦 ピアノ : 小山 順子	山下 千江	小山 順子
6. 森田 澄夫 (テノール)	<small>のみ</small> 鑿と桜 箏 : 砂崎 知子 尺八 : 川村 泰山	山根 研一	中島 はる
7. 青山 恵子 (メゾ・ソプラノ客演)	ゆるる秋 「平井澄子小品集」より 六騎 他と我 あひびき 「柳河詩曲」より 紺屋のおろく 箏・三絃 : 深海さとみ 銅鑼 : 吉川 卓見	北原 白秋 北原 白秋 北原 白秋	沢井 忠夫 平井 澄子 肥後 一郎

曲目解説

曲目1

宮城道雄の歌曲

春の唄 (1927)、秋の流れ (1942)、章魚つき (1929)

大正から昭和の前半に日本の邦楽界に革新的な業績を残した箏曲家、作曲家である宮城道雄 (1894-1956) は、生涯に、およそ350曲の作品を残しているが、その中で歌曲は童曲を除いて、およそ50曲を占める。

宮城道雄の作風は、従来の伝統的邦楽スタイルから雅楽や洋楽を取り入れた独自の世界を作り出した作品まで多岐に渡っている。歌物も、地歌風の作品から、洋楽スタイルの歌曲まで、非常に幅が広い。それらの歌曲は、永井郁子、関屋敏子、荻野綾子など、当時の一流声楽家が、初演やその後の演奏をおこなっている。また、彼の弟子達に積極的に声楽を学ばせていることをみても、彼の歌曲は、声楽家の声を念頭に作曲されたといえる。この事実からも、彼に、邦楽器を用いた日本歌曲の創造という意識があったのは明らかである。

本日は、この歌曲の中から、春にかけて青春の憂いを歌った、島崎藤村の新体詩による「春の唄」、方丈記に通じる日本人独特の諦観を表した吉田絃二郎の詩による「秋の流れ」、章魚漁の漁師の仕草がユーモラスに描かれている、玉置幸三の詩による「章魚つき」の3曲が歌われる。
(森田澄夫)

曲目2

はなぬすびと 花盗人

1988年、詩と音楽の会主催第21回「新しい日本の歌」発表会で初演。狂言風な作詞を生かすように伝統的な語り口と歌いまわしが要求される。主人公の花盗人も結局花を愛する風流人として扱われ秋の夜に啼きしきる虫の音を背景に萩、桔梗、葛、菊…と目移りするが、はからずも或る草庵に高貴な尼僧を垣間見て、びっくり仰天し、一目散に逃げ帰るというストーリーをコメディ・タッチで描いてみた。

(「望月美子独唱会プログラム」より 資料提供 秋葉てる代)

曲目3

「萬葉による挽歌」—独唱・ヴァイオリン・箏のための— (2000)

萬葉を題材とする作品は学生時代より何曲か作曲したが、この作品は1986年にヴィオラと箏を入れて作曲したものを、2000年の個展でヴィオラをヴァイオリンに代えて改訂したもの。詩は、柿本朝臣人麿が、妻の死を泣き悲しんで作った歌「うつせみと思ひし時に、たづさはりわがふたり見し…」によっている。ヴァイオリンと箏の序奏の後に、女声加わって展開する。
(中嶋恒雄)

曲目4

源氏物語によるタブロー「海辺の秋」(1988)

源氏物語の中でも特に広く知られている「須磨の巻」の章句をテキストに選び、伝統的な情感に寄り添いつつ、日本歌曲として清新な表現を試みた1988年の作品。同年ウィーンにて初演。厳しい政治状況の中で須磨へ退居し、流亡の日々を送っている源氏。その年の秋、彼は海から吹いてくる風が、遠く都から運ばれたものであることに気付く。望郷の念に駆られ、彼はひとつの歌を歌う…。

(全歌詞) 須磨にはいとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の「関

ふき越ゆる」と言ひけむ浦波、夜よるはげにいと近う聞えて、またなく哀れなるものは、かかる処の秋なりけり。御前にいと人少なにて、うちやすみわたれるに、ひとり目をさまして枕をそばだてて、よもの嵐を聞き給ふに、波ただこもとに立ちくる心地して、涙おつともおぼえぬに枕浮くばかりになりけり。琴をすこし掻き鳴らし給へるが、われながらいと淒う聞こゆれば、弾きさし給ひて、「恋ひわびてなくねにまがふ浦波は、思ふかたより風や吹くらむ」

(千秋次郎)

曲目5

古都幻想二題より「面影」とよばれる女面に (1991)

—独唱・横笛(能管・篠笛)・ピアノによる—

中宮尼寺の黒い弥勒菩薩は光の加減で微笑まれる。

恋妻を亡くした面師の孫次郎が入魂の女面を柱に掛けて外出したら、夕暮に、にっこり笑ったという。光と人間の心との対話が面白くて、いつか、何かの形で書きたいと思っていた(詩人の山下千江さんによる)。

この曲では能管と篠笛の2種類の和笛を加えています。祭囃子に欠かせない篠笛は素朴なつくりであるのに対して、能・歌舞伎のお囃子に使われる能管は、「喉(のど)」と呼ばれる細い竹を入れて音律をわざと吹けなくしており、この笛独特の「音取り(ねどり)」という奏法は靈力を醸し出します。

本曲冒頭、この能管のソロがうねるように上行して、歌とピアノを導きます。凜とした静寂の中に織り込まれた“情念”の響きを、能管と篠笛という、性質の異なる和笛を加えることにより表現したい、と考えました。1991年に初演され、翌92年「戻り橋」を加えた「古都幻想二題」として再構成し、連作初演されました。

(小山順子)

曲目6

^{のみ}鑿と桜 (1988)

30年前、イタリア留学中に、日本人の血の問題を改めて痛感した私は、帰国後、イタリアの歌とともに、日本の歌、また、邦楽器との共演を、ライフワークの一つに据え、活動を続けてきました。が、そこで改めて、邦楽器伴奏による日本歌曲の少なさに驚いた次第です。現代邦楽と言われるもののほとんどは、器楽曲で、歌曲は非常に少ないのが実情でした。

邦楽器の伴奏による新作歌曲の必要性を痛感していた私は、当時、新・波の会でともに活動していた、詩人の山根氏に、「愛している」という直截的な台詞の入った、近松の心中物のような、ドラマ性に満ちた詩を依頼。そして、その詩に、以前から、邦楽器を使用した歌曲もよく作曲されていた、中島はる氏が附曲。彼女の持つ、しっとりとした情感とドラマ性が見事に具現された、このモノオペラ風の作品が誕生しました。

—昨年暮、千駄木の病院に入院中の山根氏を見舞いに行ったとき、彼から末期癌の宣告を受けたこと、また、この、「鑿と桜」を、もう一度聴きたかったなあ、と、しみじみ言われた私は、彼を元気づけるためにも、是非再演をと、計画に取りかかりましたが、その3ヵ月後、彼は、あっという間に旅立ってしまいました。ちょうど一周忌にあたる桜の季節に、生前果せなかったこの曲の演奏を、天国の山根氏に捧げます。第5回森田澄夫リサイタルで委嘱初演。

(森田澄夫)

曲目7

ゆれる秋 (1980)

「歌をともなった曲を・・・と依頼され、様々な詩に出会い、こみ上げる感動に揺れながらも作曲に踏み切れずにいた或る日、京都の或るホールの楽屋でモニターから流れるこの詩

に出合ったのです。そして、その時、私の裡で鳴った箏の音でこの曲の最初の部分を構成しました」～沢井忠夫～

大学院在学中にこの作品をレコーディングで初演させていただきました。当時はまだ邦楽器の伴奏で歌った経験がほとんどなく、沢井先生の独特な箏の音色や繊細な音の動きに私の声や表現が対応出来ず大変苦労しました。先生の根気強いアドバイスをいただきながら何度も録り直すうちに、私の声や歌い方が変わっていき、無事レコーディング出来たこと、また私自身も楽器と声との融合とはこういうことなのか…と初めて体験した貴重な出会いをくれた作品です。

平井澄子小品集より (1959)

六騎

他と我

あひびき

「私は子供の頃から民謡や端唄、俗曲などが好きで、後に白秋や雨情の小さな詩に興味をひかれた時、これらを箏や三味線、日本の打楽器の伴奏で作ってみたいと思いました。即興的で親しみやすく、すぐ口ずさめるようなそれでいて新しい日本の歌がほしいと思いました」

～平井澄子～

これらの作品は一曲一曲異なった楽器で伴奏がつけられ、その音色や働きによって白秋の詩の内容や情景がより自然にまたより深く表現されています。

我々洋楽のものにとっても白秋の詩はたいへん親しみ深く、ピアノ伴奏の歌曲作品も多数あります。それらとまた異なった雰囲気を持ち、同じ詩でも伴奏楽器が異なることで表現法が異なることに興味を持ちました。大学院の頃、この作品を通して邦楽の発声法や表現法を一から教わった思いで深い作品です。

- ・六騎ろっきゆう—平家の落人が六人、福岡県柳河の沖ノ端に住みつき、漁師となったことから、その地を六騎の町と呼ぶ。
- ・御正忌ごしょうき—親鸞上人の御正忌。寺の手伝いをする村の若い娘達を目あてに若い漁師達が寺参りする様を表現している。
- ・きつねのろうそく—毒きのこの一種。色は赤黄色

柳河詩曲より

紺屋のおろく (1997)

「詩集『思い出』から『曼珠沙華』『あひびき』『紺屋のおろく』の三つの詩を自ら選び『柳河詩曲』とした。

『紺屋のおろく』は柳河の粋な女を詩ってるが、詩が含む酒精分は江戸の情緒で醸されている。江戸時代末期に好んで行なわれた種々の歌が持つ音律を応用して七七七五律が用いられており、「いき」の軽さと洒落を響かせる。一言ではあるが外来語があらわれているのでこれを厭い初出を採った。」～肥後一郎～

同詩でピアノ伴奏による高木東六作曲の歌曲がある。

初演の深海さとみさんの演奏を聞き箏の動きは勿論、メロディーもダイナミックなユリや粋なコブシがふんだんに使われており、その迫力に感動しました。洋楽のヴィヴラートとは全く異なるユリはたいへん難しく、私にとって新しい挑戦となりました。

(青山恵子)